第二部　発信する学園

二〇一〇年七月二日

外苑キャンパス開校の報告

藝術立国の運動を世界へ

弥生の京都、縄文の東北、現代日本の中心・東京、三つの拠点を結んで

今、なぜ外苑なのか—

いまから百五十年前、時は幕末、
日本は未曾有の危機に直面していた。
国の政治は混乱を極め、欧米列強がアジアの国々を席捲し、
もはや日本という国は滅びてしまうのではないか、
そう思わせる程の重大な危機であった。
その危機の中から、幕末の志士たちが立ち上がり、
日本の行く末を、命がけで考え、闘い、
明治という新しい時代を切り開き、
近代日本の礎を築いていった。
明治があったからこそ、今日の日本がある。
その明治の魂を留めた場所が、神宮外苑にほかならない。

明治神宮外苑は、また、
戦争の悲劇の歴史が刻まれた場所でもある。
日本の敗色が濃くなった昭和十八年十月二十一日、
冷たい雨の降る神宮外苑競技場で、
出陣学徒壮行会が挙行された。
戦場に赴く青年三万五千人、見送る学友・女生徒六万五千人。
集まった十万人の若者たちの胸中は、送る者も送られる者も、
自らの運命と祖国の前途を思い、悲壮であった。
それ以降、日本各地で壮行会が行われ、
学窓を離れて戦地に赴いた青年は十三万人を超える。
そのうち、いったい何人が、生きて再び祖国に戻り得たか。
見送った女生徒のうち何人が、
生きて戦後を迎えることができたのか。

我々には、彼ら青春の魂の叫びを、わだつみの声を、
今に生かし受け継ぐ責務がある。

日本の近代の夜明けである明治を称揚する神宮外苑。
戦争による悲劇の歴史を刻んだ場所でもある神宮外苑。
その地に、日本の藝術立国をめざす新たな拠点が生まれたことに、
ある種の歴史的運命を感じざるをえない。

芸術の運動を武器に平和の闘いを決意した後、
この神宮外苑の地に立ち、
霊感のごとき思いが体を貫いたことを思い出す。
日本の再生と平和を願う拠点を置くべき場所は、
この地をおいてほかにはない—その確信に身が震えた。
その願いが、明治神宮の多大なるご理解とご協力によって、
ついに叶うことになった。

これは、神の思し召しに違いない。

振り返ってみれば、
敗戦後の混乱期に吉田松陰の思想と出会い、

戦後日本の復興を願うことから、私の大学創りが始まった。
民族の歴史と文化の源流をたどり、
日本人の魂の故郷を明らかにすることこそ、
わが大学の出発にあたっての志であった。
そして、千二百年を超える芸術と文化の歴史をもつ京都こそ、
日本人の魂の故郷に違いないと考え、京都に大学を創設した。

しかし、大学を創り、芸術と文化の探究を重ねるうちに、
新たな疑問が湧きあがってきた。
京都が日本文化の中心となる以前、
日本はいかなる姿であったか。
弥生の向こう側にあるものは果たして何か。

やがて、縄文の東北こそ、
日本に残された最後の「母なる大地」であり、
現代文明の過ちを克服するための最後の砦であると確信したとき、
東北・山形に、いまひとつ、大学を創る決意をした。

こうして、弥生の京都と縄文の東北を結んで、
日本列島を貫く動脈ができあがった。

しかし、それだけでは日本を再生させるに十分ではない。
そこから四方へと血管をはりめぐらし、
日本の隅々にまで生き生きとした血流を蘇らせるには
どうすればいいのか。
その答えが、通信による芸術教育であった。
いまや藝術立国の志は、
京都、東北に学ぶ五千四百名の若者たち、
通信教育に学ぶ五千六百名の大人たち、
さらには両大学の「こども芸術大学」に集う母親と
子どもたちの心に、
静かに深く浸透しつつある。

そしていま、
日本の首都、現代文明の中心地である東京に
もうひとつの拠点を定めたことによって、
弥生の京都から発して、東京を経由し、縄文の東北へと至る
藝術立国の運動の大きな骨格が出来上がった。

これを基盤として、いよいよ世界に向かって、
芸術の心によって平和をめざす運動を広げていきたい。

人類苦難の時代に、
多くの人々の幸せのために汗を流す大学、
芸術の心によって戦争を阻止し、平和を希求する大学、
それが、わが大学に課せられた使命である。

いかなる困難があっても、
弥生の京都、縄文の東北、現代日本の中心・東京、
この三つの拠点を結んで、
日本の再生と平和のために、新たな闘いに臨むことを誓う。

二〇一〇年七月二日

藝術学舎

二〇一〇年に東京の明治神宮外苑に「外苑キャンパス」を開設しました。外苑キャンパスは首都圏に在住・在勤する社会人を対象にした芸術教育を行う通信教育課程のスクーリング会場としての機能を人形町にあった東京サテライトキャンパスから移転しましたが、同時に、学生ではない幅広い一般の方に向けて大学の教育を開放する生涯学習機関「東京藝術学舎」を設置しました。ここでは大学教員が監修する公開講座を社会人でなくても、十五歳以上の人で学ぶ意欲があれば、誰でも受講資格があり、より開かれた大学を目指した歩みをスタートさせました。その後、二〇一二年には大阪梅田の富国生命ビルに「大阪サテライトキャンパス」を開設したことを機に「大阪藝術学舎」を設置しました。さらに、二〇一七年には京都瓜生山キャンパスで行われていた「瓜生山エクステンションセンター」を「京都藝術学舎」と改称し、同時に、東京、大阪、京都の三つの拠点を持つ「藝術学舎」へと生まれ変わり現在に至ります。主要なスタッフは通信教育課程を担当している教職員が兼ね、通学課程や東北芸術工科大学とも連携しながら講座を運営しています。現在では、年間四五〇もの講座を開講し、受講生は年間約一万名の規模となっています。近年、オンライン受講が可能な講座も大幅に増加し、会場へお越しいただけない方への受講機会も拡大しています。

藝術学舎は正規の大学ではないものの、その開講科目のほとんどが通信教育部の単位と連携が可能で、一般の方が受講した場合も、通信教育部入学後に単位として認定されます。もちろん、通信教育部の在学生や卒業生も多数受講しています。特に卒業生にとっては卒業しても生涯学び続けられる場となっています。

世の中にはすでに多くの大学公開講座や芸術に関する催しがありますが、藝術学舎では、藝術が本来持つ、より良く生きるための知恵や技芸という意味を大切に、その能力を伸ばしながら、芸術に携わる者同士のつくる共同体となれるよう、多様な講座を設けています。

東北芸術工科大学

東北の山形市には東北芸術工科大学が、瓜生山学園の全面的な支援のもとに一九九二年に開設されました。東北地方は、青森県の特別史跡・三内丸山遺跡（日本最大級の縄文集落跡）で有名なように日本の先進文化であった縄文文化が豊かに育った地域です。

他方、京都盆地をはじめとする西日本地域は大陸・朝鮮半島から多数の人びとが移住して進んだ文化や技術をもたらした弥生文化を形成した地です。そして首都・東京は現代日本文明が生んださまざまな先端文化が蓄積されつつある地です。

本学と東北芸術工科大学とは、共通の建学理念をもち、「こども芸術大学」を両大学のキャンパス内に開設（二〇〇五年）したり、東京・外苑キャンパスを共同開設（二〇一〇年）するなど、連携してプロジェクトを進めています。また、二〇一三年には「藝術立国之碑」を両大学キャンパスに建立しました。

学生の相互交流も進めており、双方の大学の夏期集中科目を開放しあう単位互換制度や、半期の間在学して学修する交換留学制度を設けています。

東京外苑キャンパス

大阪サテライトキャンパス

東北芸術工科大学

二〇〇二年　三月

こども芸術大学　設立の宣言

〈母なる大地〉の回復を願って

日本とは何か。
日本人とは何か。
日本人の魂の故郷は何処にあるのか。
一九七七年、京都・瓜生山の地にわが芸術大学が誕生するに至った原点は、この命題のうちにあります。
民族の歴史と文化の源流をたどり、日本人の魂の故郷を明らかにすることこそ、わが大学の出発にあたっての志でした。この志を実践する新たな芸術文化運動を、私たちは「京都文藝復興」と名づけました。
四半世紀の歩みのなかで、将来の日本を背負う十八歳の青春を養う教育に加え、通信による芸術教育の開学によって、三十代、四十代、さらには七十代、八十代までの人々が私たちの運動に加わることになりました。さらに、東北の大地・縄文の土壌に東北芸術工科大学を設立したことによって、弥生から縄文へと列島を貫く日本文化の背骨を形成することができました。

すなわち、弥生以来の日本文化の源流である京都から発して、日本列島を縦断し、縄文の心が息づく東北へとつながる太い動脈と、そこから四方へと葉脈のごとく伸びていく通信教育の活動によって、日本中に再び生き生きとした血流を蘇らせる可能性が、現実のものとなりつつあるのです。
しかし、ここに至って、私たちの芸術運動をいま一度ふりかえってみると、なお足下には決して忘れてはならない重大な課題が残されていることに気がつきます。
その課題とは、こどもたちの魂の教育にどう取り組むか、ということです。
「三つ子の魂」ということばがあります。
この魂の教育を忘れて、本当の日本の再生はありえません。
本学園は、短期大学開学と時を同じくして、「児童図書館」を開設し、「三つ子の魂百まで」を旨として、芸術教育の芽を育むべく実践してきました。あれから二十五年、年間延べ一万六千人、二十三年間で三十六万八千人のこどもたちと母親のために自由な遊びの場を開放しつづけ、いまやそのこどもたちもまた、親となりつつあります。
今日までの学園の歩みは、こどもから母親に至る地域と一体になったこの闘いに、大きく支えられてきました。
私たちの運動が日本全国に広がりつつある今こそ、学園の出発点に立ち戻り、これまで進めてきた闘いを、いま一度、足下から再構築し直してみようと決意しました。
その新たな闘いの姿こそ、これから取り組もうとする「こども芸術大学」なのです。
三つ子の魂をどう育てていくか。
この課題に立ち向かうとき、こどもたちの母親とどう向かい合うかという問題を抜きにすることはできません。
こどもにとって母親は、地球であり大地です。
拠って立つ大地が確固としたものでなければ、人間は正しく成長していくことはできません。
そのことは、〈母なる大地―地球〉を存亡の淵にまで追いやった今日の人類の姿を省みれば、直ちに理解されます。

人類がいわば胎児であった原始に思いを馳せてみれば、地球は子宮であり母でした。
永い人類史の歩みのなかで人類をあたたかく育んできた、命あふれる大地、豊穣の海、澄みわたった大気。
それら地球的な母性に大きく抱かれて、人類は世代から世代へと生の営みを紡いできたのです。
しかし、いつしか人類は近代文明の申し子である果てしない欲望の虜となり、やがて自らを生み育ててきた〈母なる大地〉を傷つけ、破壊し尽くすに至りました。
その結果、どのような事態に立ち至ったか、今日の日本の姿をみれば、もはや申し述べるまでもありません。
いかにして、新しい生命に対する深い愛情を取り戻し、私たちの心のなかに〈母なる大地〉を回復するか。人類の未来は、この一点にかかっているのです。
こどもたちに、お母さんの体内で育まれて今日あることの意味を語りかけたい。
お母さんたちと共に、〈母なる大地〉について語り合いたい。
宇宙、地球、人間、いつもそうしたテーマを持ちながら、こどもたちに接し、お母さんたちと共に生きられるような、そんな環境をつくりだしたい。
長年にわたり培ってきた地域のこどもたち、母親たちとのつながりをいっそう深め、幼児から学生・社会人にまで連なる一貫した芸術教育、即ち人間教育の基礎を成す将来像を見据えつつ、こどもと母親のための教育機関、「こども芸術大学」の設立を試みたいと思います。

二〇〇二年　三月

瓜生山キャンパスの中にある　認可保育園　こども芸術大学

「認可保育園　こども芸術大学」は、二〇一九年四月一日に誕生しました。「こどもこそ未来」と掲げられた「未来館」四階にあります。高台にあり、西のテラスからは、京都市内が一望でき、雨上がりには大きな虹や、夕日や夕焼けを眺めることもできます。東のテラスを出ると瓜生山の山肌に直接触れることができます。瓜生山を庭にして自然の中で遊ぶ保育園です。園庭には、山で採ってきた大きな長い竹が一本斜面に沿って置かれています。その竹がこどもの格好の遊びを誘っています。またいでするする登り、またいでトントンはねて降りる。竹が、こどもの動きに呼応してしなり、そのしなり加減の振動を全身で感じて笑顔が広がり、こどものこころとからだがひらかれていきます。

未来館は、本学名誉教授の横内敏人先生の設計で二〇〇四年に建てられ、翌年の春、「母なる大地の回復」を願い「こども芸術大学」が開設されました。二〇一九年、その施設の良さを最大限に活かし、一歳児から就学前のこどもが、朝七時から夜六時半まで心地よく暮らすことができる環境に改修をしました。木のぬくもり、北の大きなガラス窓に広がる借景のホール、床の間に押入れを備えた和室、額縁のような東の窓枠、上階テラスにある、こどもが水遊びをするガーデンプール等はそのままです。窓からは、自然光が差込み、山の木々の緑が美しく目に飛び込んできます。保育環境としてはとても恵まれています。その環境のある暮らしの中で、こどもは想像し、創造へと広がる楽しみを味わっています。

さらに、大学内にあることから、学生のみなさんの、ものを生み出し創る情熱やエネルギーを身近に感じることができます。制作の工程を楽しみに学内散策に出かけると、こどもたちに手を振って応えてもらったり、作品の中に入らせてもらったりと、おにいさん、おねえさんとの世代を超えた自然なかかわりが生まれています。学生のみなさんの表情もそのときは自然にほころんでいます。こどもたちの魅力です。

瓜生山を庭にして遊び、四季の風、香り、彩りが五感を通して感じられる環境の中で、様々な心動く出会いや感動を表現し、伝え合い、喜び合い、認め合い、育ちあえる保育に、今、取り組んでいます。

また、二〇二六年四月には、滋賀県守山市に「認可保育園　守山こども芸術大学」が新たに誕生しました。瓜生山の「こども芸術大学」と同じく「こどもこそ未来」を保育の根底におき、守山のこどもたちのウェルビーイング向上をめざしています。園内にはホール天井に大空を投影できるプラネタリウムや、厳選した七〇〇冊以上の絵本を備える図書室があり、直接的な体験によって生まれた好奇心を言葉により広げ深めていく環境が整っています。

こどもたちが言葉を大切にした環境の中で想像力を育み、創造していくことの楽しさや喜びを感じとってほしいと考えています。

こども芸術大学のある未来館

二〇一二年　一〇月

文明哲学研究所　設立の宣言

核廃絶と世界平和のために

「藝術立国」を建学理念とし平和を希求する我が大学は、
人類存亡の淵に立つ今このとき、
人間の良心を基調とする新たな文明の創造をめざし、
文明哲学研究所の設立を決意した。

宇宙の神秘に平伏せ
地球の偉大さに畏れを抱け
生きとし生きる命を愛し尊べ

人間とは何か。
文明とは何か。
人間と文明との関係はいかなるものか。

人類史は、文明の興亡盛衰の歴史であった。
地球上に人類が誕生して以来、いくつもの文明が生まれ、
隆盛を極めては衰退滅亡し、
その繰り返しの果てに、今日の現代文明に至った。

—どの文明においても、
滅亡の基本的な原因は社会の内部からの崩壊現象であり、
外部からの侵略だけで崩壊した文明は本質的に一つもない—
諸文明の興亡盛衰をつぶさに研究したアーノルド・トインビーは、
歴史の教訓として、そう喝破した。
いかなる文明もいつか崩壊する。
廃墟となり砂漠と化した過去の文明の痕跡は、
永遠不滅の文明は存在しないことを教えている。

有史以来、人類は自らの生への欲望を達成するために、
ひたすら便利さと効率を求め、
生きとし生きる生命を奪い、地球を破壊し、
いつしか、それが文明であると信じるようになった。

人類史を通じて、
今日ほど多くの人間が、かくも裕福に暮らした時代はない。
しかしその陰で、これほど多くの人間が地獄の苦しみに喘いでいる時代もない。
貧困に苦しむ十億人を超える人々、
飢餓で死んでいく数多くの子どもたち、
果てしなく続く戦争と殺戮、
地球上の生物種を刻々と絶滅に追いやる自然破壊。

なかんずく、
現代文明が生み出した最大の悪魔である核。
この核こそ、文明最大の矛盾である。

現代文明の基軸をなす最先端の科学技術の所産でありながら、
その科学技術をもってしても制御不可能な核。
その廃絶なくして、新たな文明への道は拓けない。

文明の闇と光。
人類が一万年をかけてたどり着いたその姿を省みて、
文明とは、善であったのか、それとも悪であったのか。

幸せと平和をひたすら追い求めながら、
自らの欲望に翻弄される宿命を負った人間。
美と真実に憧れながら、
自己保存のためには他の生命を抹殺することも厭わない人間。
善と悪の狭間で絶えず揺れ動く人間。
我々は、この人間存在の矛盾を直視し、
自己中心的な欲望や傲慢と対決しなければならない。

文明とは何か—
この根源的な問いのもとに、いま我々は、新たな闘いを開始する。
人類存亡の淵に立つ今このとき、
欲望に支配された文明の潮流を断ち切り、
新たな文明の創造に向かわなければならない。

闘いの武器は、人間の良心である。
文明に対する徹底した自己反省と、
何よりも、人間だけに備わっている良心の復活、
それこそが、新たな文明哲学の出発点である。

いまここに、文明哲学研究所を設立し、
アジア全域の志ある人々、さらには
平和を希求する全世界の人々と堅く連帯し、
人間の良心を基調とする新たな文明の創造に立ち向かうことを誓う。

二〇一二年　一〇月

芸術とは何か、人間とは何か

文明哲学研究所、通称文哲研（ぶんてつけん）は、本学園の建学の理念である「藝術立国」をめざし、「芸術とは何か、人間とは何か」を中心テーマとする研究組織として、二〇一二年、本学の創設者・徳山詳直によって設立されました。

芸術と科学の架橋、社会における芸術の役割、芸術がこころに及ぼす影響といったテーマについて、人文社会科学、行動科学など多面的なアプローチで明らかにし、「藝術立国」の実現に貢献することが本研究所のミッションです。芸術という表現活動それ自体が、人間の生き方や社会の在り方を変える原動力となることを、研究や社会発信という日々の活動を通して明示してゆくことをめざしています。

どんな芸術に価値があるのか、何が正しい芸術のあり方なのか。長い人類の歴史の中では、自らの正しさを主張する芸術が、人々に不幸をもたらしたこともあります。本研究所では、そうした負の歴史も忘れることなく、より公平に、学術的に、芸術とは何か、人間とは何かを考え、本学の芸術教育の根幹にある哲学や理念について探求していきます。

徳山詳直が建立した「藝術立国之碑」には、本研究所の設立宣言の一節より「宇宙の神秘に平伏せ　地球の偉大さに畏れを抱け　生きとし生きる命を愛し尊べ」という言葉が刻まれています。

本研究所が設立された当初は、有識者を招いた第一次平和文明会議などを通して、「核」や平和の問題を中心に議論を重ねました。現在は、より基礎的な研究に重心を移しています。

二〇一七年からは、宇宙や地球、生命について、サイエンスの視点から考え、学ぶ取り組みとして、「ART meets SCIENCE」プロジェクトを開始しました。講演、対談、フィールドワーク、ワークショップを中心とした活動を行っています。

文哲研の活動内容

一　「芸術とは何か、人間とは何か」を考えるための研究を進める

「芸術と自然」「芸術と社会」「芸術とこころ」という大きな枠組みの中で、芸術する心の起源、芸術が心にもたらす影響、芸術と社会のかかわりなど、各所員が設定した課題のもとで研究活動を行います。多分野の研究者による学際的なアプローチを重視します。

二　芸術と社会の新しい関わりを検討する

心を動かす芸術、あるいは心を豊かにする芸術とはどのようなものか、芸術のもつ多面的な影響力について、歴史的観点、文化比較の観点から明らかにします。その結果に基づき、芸術、アート、デザインがこれからの社会にどのように関わっていくべきか、その新たな可能性を探求します。

三　公開セミナーや公開シンポジウムを開催する

「芸術とは何か、人間とは何か」を考える機会を提供するため、学内学外の各分野で活躍する講師を招いた公開講座を実施し、講演会、連続講義、フィールドワーク、アーカイブ配信等を行います。

また今後も新たな試みを学内学外に発信し続けます。

四　教育活動

本学の学部・大学院・通信教育部における複数の授業と、大学院生の研究指導を行い、本研究所の研究テーマに関連する学生の自主的な勉強会や活動の支援を実施します。

本研究所は、創設者・徳山詳直の旧宅を改装した「瓜生山荘」で研究活動を行っています。